

第二八回国際軍事史学会参加報告

庄 司 潤一郎

第二八回国際軍事史学会大会が、二〇〇二年（平成十四年）八月十一日から十六日までの六日間にわたって、アメリカ軍事史学会（オハイオ州立大学教授アラン・ミレット会長）主催のもと、ヴァージニア州ノーフォークにおいて開催された。

本学会は、軍事史研究に関する国際交流と世界的規模での軍事史の普及・啓蒙を目的として、二〇世紀初頭に設立された国際的な組織である。個人ではなく各国が単位となって会員を構成しており、現在三三カ国が加盟している。一九三八年チューリヒでの第一回大会以降、各国の持ち回りで大会が催されており、特に近年は毎年開催される年次大会となっており、本大会は第二八回にあたる。戦史部関係者は、一〇年ほど前より定期的に参加するようになり、最近では発表を実施するなど積極的に参画している。今大会には、二七カ国から一七〇名近くが参加した。開催地アメリカのほか、例年通りフランス、イタリア、ドイツなどヨーロッパが大半を占めていた。特に、近年毎回積極的に参加し発表も

行っていた、日本と並んでアジアでは唯一の加盟国である中国が不参加であったのは目立った。

日本からは、戦史部から林吉永部長、石津朋之主任研究官、立川京一主任研究官、筆者、そのほかに戸部良一防衛大学教授（兼図書館長）、源田孝同教授（一空佐）、秋谷昌平元防衛研究所図書館長ののべ七名が参加した。

今回の共通テーマは、「アメリカへの到来―西半球の発展に与えたユーラシア大陸の軍事的影響―」であり、大会の全般日程は左記の通りである。

八月十一日（日）

〇九〇〇～一七〇〇 参加登録

一八〇〇 ハンプトン・ロード海軍博物館及び戦艦「ウイス

コンシン」艦上でのレセプション

八月十二日（月）

〇九〇〇～一〇一五 オープニング・セレモニー

一〇四五～一二一五*第一パネル「ラテンアメリカにおける

ヨーロッパ植民地列強」

一四〇〇～一五三〇*第二パネル「十七、八世紀におけるヨ

ーロッパとアメリカの戦争様式の融

合」

第四パネル「二〇世紀におけるアメリ

カ軍に対する外国の影響」

一六〇〇～一七三〇*第三パネル「北部アメリカの独立戦争」

第五パネル「二〇世紀における空と地

上での戦い」

八月十三日(火)

〇九〇〇～一〇三〇*第六パネル「戦闘者と観戦者―北部ア

メリカの独立戦争におけるヨーロッパ人

―」

一一〇〇～一二三〇*第七パネル「一八六〇年代におけるリ

オ・グランデ南部の戦争の衝撃」

一四〇〇～一五三〇*第八パネル「海軍と海軍戦略」

第一〇パネル「軍事史分野における新

たな革新的著作」ラウンド・テーブル・

デイスカッション

一六〇〇～一七三〇*第九パネル「カリブ海及び南米におけ

る独立戦争」

第十一パネル「新世界征服における

武器と戦術」

一八三〇～二〇〇〇 マッカーサー記念館・ライブラリーで

のレセプション

八月十四日(水)

半島史跡研修(ジエームズタウン入植地、ヨークタウン戦場、

ニューポート海事博物館、モンロー要塞など)

夕刻 デイナー(モンロー陸軍基地将校クラブ)

八月十五日(木)

〇九〇〇～一〇三〇*第十二パネル「北部アメリカの戦争と

キューバの反乱」

一一〇〇～一二三〇*第十三パネル「戦争に関する思索」

一三三〇～一五〇〇*第十四パネル「英米(アングロ・アメ

リカン)戦略の現実と理解」

第十五パネル「十七、八世紀における

ヨーロッパの軍事実践とアメリカの経

験」

夕刻 米海軍高性能ミサイル駆逐艦「ゴンザレス」見学

八月十六日(金)

〇八三〇～一〇二〇*第十六パネル「二〇世紀におけるヨー

ロッパと大西洋の防衛」

第十七パネル「米国における軍事史教

育「ラウンド・テーブル・ディスカッション」

一〇三〇〜一二〇〇*第十八パネル「十九世紀中期以降の戦

争と軍事力」

一三三〇〜一六〇〇 総括会議

一八三〇〜二二三〇 オールド・ドミニオン大学でのレセプ

ション・晩餐会

研究発表は、十八のパネルから構成されており、うち二つのパネルはラウンド・テーブル・ディスカッションに当てられている。したがって純粹の研究発表は、残り十六パネルで、より共通テーマに関係した内容で、各国の軍事史学会が各一件づつ推薦した発表（*印）と、各個人の希望に基づきアメリカ軍事史学会が承認した発表の二種類から成り立っている。発表本数は、ラウンド・テーブル・ディスカッションを含め五六本（一本は直前にキヤンセル）、各二〇分発表、一〇分質疑という時間配分で行われた。同時通訳は、英語・フランス語、スペイン語の三ヶ国語に対して提供された。近年スペインや中南米などスペイン語圏の参加者の増大が目立ち、開催地がアメリカということもあり、同時通訳は、常設の英仏語に加え、ドイツ語に代わってスペイン語が採用された。

そのほかに、オープニング・セレモニーにおいて、軍事史・軍

事革命研究の世界的権威であるオハイオ州立大学のジェフリー・パーカー教授による「一五九〇年代の軍事革命と一九九〇年代軍事分野の革命 (RMA)」と題する基調講演が行われた。

発表内容は、共通テーマが開催地アメリカに因んでいたため、多くは十八世紀後半以降のアメリカ独立戦争、十九世紀の南北戦争、さらに南米・カリブ海地域における独立運動・軍事的発展を主対象として、ヨーロッパの与えた影響、欧米間の相互関係などを扱ったものであった。現在においても、欧米は軍事同盟はもちろん、強固かつ独特な関係を保持しているが、その歴史的由来・根拠を、あらためて実感させるものであった。ヨークタウンの戦場で国際軍事史学会による戦没者追悼の行事が執り行われたが、独立戦争に参加した英米仏独の国旗が掲揚されるとともに、四ヶ国の参加者代表が献花を行ったのは、象徴的な場面であった。

このように、内容が大西洋兩岸という地域的に限定されたものであったため、日本人発表者にはテーマ選定において、厳しい面があった。日本からの発表は、林戦史部長「一九四五年以降日本がアメリカにもたらした『No Impact』という影響」（第四パネル、別稿参照）、源田防大教授「戦略爆撃思想の流れ」（第五パネル）、筆者「次なる戦いのイメージ形成―第一次世界大戦の日本への衝撃―」（第十三パネル、別稿参照）の計三本であった。

こういった共通テーマの特殊性に加え、韓国の加盟からの離脱（現在復帰を申請中）、今大会への中国の不参加ということもあり、

従前に比べより一層欧米偏重を痛感した。軍事史学という学問の歴史・伝統・特質から一定程度やむを得ない面もあるが、軍事に関する世界史において、非欧米世界の歴史を無視して語り得ないことはいうまでもない。その意味で、軍事史研究の権威パーカー教授が基調講演のなかで、織田信長による長篠の合戦をはじめ数ヶ所日本に触れたのは印象的であった。

現在のような一方通行を少しでも改めるためには、先ずは日本からの積極的な情報発信が求められており、国際軍事史学会大会はその最適な場であろう。

研究発表において示された手法は、伝統的な実証史学によった堅実なものが多く、なかには細かい事実を詳細に掘り起こす内容のものも散見された。このことは逆に、発表の特殊化を招き、当該分野の研究者以外にはいまひとつ関心を惹き起さない面があった。

それを補う意味において、今回初めて「ラウンド・テーブル・ディスカッション」が設けられたのは、意義深いものであった。軍事史に関する最近の動向、軍事史教育のあり方といった普遍的なテーマについて、背景の異なる各国の専門家が意見交換を行うことは極めて有益であった。日本においても、近年、歴史教科書のあり方をめぐって、近現代史や戦争の叙述に関して論争が行われており、参考にすべき点がいくつか感じられた。

筆者にとり、アメリカは初めての訪問であったが、学会の史跡

研修において、一般の観光では訪れることのできない独立戦争や南北戦争ゆかりの地を視察し得たことは大きな意義があった。そのほかに、プログラムの一環として、マッカーサー記念館・ライブラリー、最新鋭のミサイル駆逐艦「ゴンザレス」、戦艦「ウイコンシン」を見学した。

特に印象に残ったのは、史跡研修で訪問したニューポート海事博物館における「囚われの航海―大西洋奴隷貿易とアメリカの形成―」と題した特別展示であった。ここでは、奴隷の悲惨な歴史について、アフリカでの拘束、大西洋の過酷な移送、新大陸での奴隷労働の実態が極めてリアルに描かれていた。映画「ルーツ」が反響を呼んで以降、広く知られるようになった事実であるが、特に展示ではアメリカの建国・発展に寄与した奴隷の役割を積極的に評価していた。世界的に拡大しつつある「歴史の見直し」は、アメリカも例外ではないと痛感した次第である。

国際軍事史学会大会への参加は、研究発表、史跡研修のほか、主要各国の著名な軍事史研究者が年に一度一箇^堂に会する唯一の機会であるだけに、彼らとの交流・意見交換を行うことにも大きな意義があることは言うまでもない。

さらに、戦史部のカウンターパートにあたる機関に、多くの場合各国軍事史学会の事務局が置かれ、大会にも当該機関の長をはじめ研究者が多く参加しているため、組織間交流の場としても期待される。軍事史学会での交流を通してこれまでも、今大会にも

参加したドイツ国防省軍事史研究所長ヨルグ・ドゥツプラー海軍大佐や、オランダ王立陸軍軍事史研究所長のピート・ケンプハウス氏を、戦史部は招聘している。

また、ドイツ国防省軍事史研究所が、学会の機会を利用して、近郊のポーツマスにおいて、「友好の発展―独米関係の選ばれた記録より―」と題する展示会を行っていた。内容は、十七世紀のドイツ人移民から、両大戦をへてドイツ統一にいたる独米関係に関する史料の展示であるが、日本にとっても参考となる情報発信の試みではないかと感じた。

今後の大会予定は、来年度の第二九回国際軍事史学会大会が、二〇〇三年八月一〇日から十六日にかけてブカレスト（ルーマニア）において、「戦争、軍事とメディア―十七世紀から二〇世紀にかけて―」を共通テーマとして開催される予定である。再来年度の第三〇回国際軍事史学会大会は、二〇〇四年八月一日から七日にかけてラバト（モロッコ）において、「主要な世界戦争を通して見た防衛における経済的視点」を共通テーマとして行われる。